

いちばん好きなのは、原田マハ

図書館係 阿部健治

松竹の100周年記念映画『**キネマの神様**』が8月から公開されている。これは、近いところでは『**家族はつらいよ**』シリーズ（全3作）で知られる山田洋次監督（もちろん、私たちの世代には「フーテンの寅さん」を主人公とする『**男はつらいよ**』シリーズ（全50作。「一人の俳優（渥美清）が演じた最も長い映画シリーズ」としてギネスブックにも登録されている。）の方が身近だが、その山田洋次監督の89作目の作品だとか。山田洋次は今年89歳だからゴルフ流に言うなら「エージシュート」とも言える偉業である。

この映画は本来、去年公開するはずだったのが、コロナ禍により延期されたのだが、そのみならず、この映画で初主演となるはずだった「志村けん」がコロナウィルス感染症で亡くなり、急遽主演が「沢田研二」に代わるという前代未聞のできごとが起きた（キャラが全然違うような気もするが、それでもまた違った味で映画が成立するのがおもしろいところだ。）。

この『キネマの神様』の原作が**原田マハ**で、主人公「ゴウ」（「円山郷直（まるやまさとなお）」という名前からそう呼ばれた）は彼女の父がモデル。作者の思い入れの強い半自伝的な小説なのである。原作の大筋は以下のようなものだ。

「ゴウ」は映画が好きで、親友とも言える「テラシン（寺林新太郎）」が経営する名画座（配給会社の意向でなく、館主が選んだ映画を上映するタイプの映画館）に通い詰める老人なのだが、同時に「ギャンブル依存症」でもあって、借金が絶えないという困り者なのであった。娘の「歩（あゆみ）」（作品はこの人の視点で進行する）は大企業の課長であり、「ゴウ」の自慢の種だったのだが、シネコンを作るというプロジェクトで社内抗争に巻き込まれ、退職してしまう。それで、父の影響もあって好きだった映画評論で何とか食いつなぐという境遇になったのだった。歩は父にも好きな映画の力で立ち直ってほしいと願い、ブログに映画評論を書かせることにした。すると、仮名（「ローズバッド」）ながら映画評論の大家と思われるアメリカ人からの反応があり、二人はブログ上で論戦を戦わせることになる。この論戦は話題になり、アクセス数はうなぎ上りに増えた。その頃、テラシンの名画座はシネコンに押され廃業の危機に陥っていたのだが、これもゴウがブログで存続を呼びかけたため、再び人気になるという大成果も挙げた。このように順風満帆の展開だったのだが、突然「ローズバッド」からの反応がなくなってしまう。実は彼は癌に冒されていたのだ。「ゴウ」はお金をかき集めて何とかアメリカに飛ぼうとするが……。

小説『キネマの神様』が発表されたのは2008年。13年も前の話なのに、既にSNSの大きな力を認識し、作品に生かしている原田マハの先進性には驚かされる。同時にこの物語は、より本質的には「人を動かし、幸せにするのは人と人との絆しかない」ということを恐ろしいほど雄弁に語っている。作中で「ゴウ」は「人生はすべて映画が教えてくれた」と繰り返す。映画を見るということはその映画を作った人と絆を結ぶことだ。そして、映画を見た人同士で熱き論戦を交わすこともまた、人と絆を結ぶこと。それがかけがえのないものに育っていく過程をこの物語は描いているのだ。

筆者より10歳くらい年上の、いわゆる「団塊の世代」より上の人たちは映画以外に楽しみがなかった（筆者などはまさに「テレビ」世代。過剰なスポンサー

への付度など、問題点も十分感じてはいるが、それでもテレビが好きなのだ）。『キネマの神様』を読んで、そうした世代の「映画愛」が強く胸に響いた。死を目の前にした「ローズバッド」は、「自分が一番高く評価する映画を教えてやるから」と言って、「ゴウ」をアメリカに呼び寄せようとするのだ。

この映画が何かは本文の中で暗示される。筆者もそこからいろいろと調べて作品を突き止めた（有名なイタリア映画だ。皆さんも原田の小説を読み、その映画を是非見てみて。）。そこでは、その時代、そのイタリアの村にとって、「映画」がどれほど魅力的なものだったか、それが余すところなく描かれていた。

原田マハは有名な美術館のキュレーター（展覧会の企画を立て、豊富な知識と交渉力によってそれを実現させる仕事）を歴任した人で、その経験を元にしたアートフィクション（ピカソを描いた『暗幕のゲルニカ』やルソーを描いた『楽園のカンヴァス』、俵屋宗達を描いた『風神雷神』他多数ある）は他の追従を許さない。これらのすばらしさは言うまでもないことで、筆者も最初に読んだのは『楽園のカンヴァス』だった。しかし、原田マハの魅力はここにとどまらない。日本版ヘレンケラー物語とも言える、『奇跡の人』は、津軽という土地、明治という時代の人間をこの上なく見事に描いていて、本当に感心した。「津軽三味線」は、盲目の人を生かすために生まれたのだ。その音色には「魂の響き」を感じるが、これは津軽の人たちの思いやりと知恵が生み出したものだったのだ。

「業が深い」としか言い様がないことを次々にしてしまう「人間」だが、それを知っているからこそ、補い合い、寄り添うことができる。そういう、深いところでの「人間」への寛容さというものが原田マハの作品にはある。また、ケセラセラ、なるようになるという楽天性も感じられて、筆者は原田マハが好きなのだ。

映画『キネマの神様』には、原作にはない若き日の「ゴウ」と「テラシン」の物語がある。そこでは親友である二人と「ゴウ」の妻になる「淑子」（よしこ）はいわゆる三角関係である。この時の「ゴウ」を菅田将暉が、「淑子」を永野芽郁が、「テラシン」を野田洋次郎（知らない役者だと思ったら、有名なバンドのボーカルだとか）が演じている。若者たちを描くことの映画制作上の必要性はわかるものの、かなり大きな変更なので、原作使用許諾を申し入れるときには、流石の山田洋次も原田の怒りに遭うのではないかと緊張したらしい。ところが原田は、「大きな変更です。しかし見事な変更です。」と言って使用を快諾し（ここまでなら他にもあるだろうが）、その後、日ならずして、映画の内容をもとにした『キネマの神様ディレクターズ・カット（版）』まで描いてしまったのだ！何というきっぷのよさ。流石は原田マハである。

傑作が目白押しの原田作品だが、筆者のベスト1はデビュー作である『カフーを待ちわびて』である。沖縄与那喜島に住む友寄明青（ともよせあきお）は祖母と二人暮らしで雑貨屋をやっていたがその祖母も亡くなってしまった。彼は北陸に旅行した際、ある神社に「嫁に来ないか」と書いた絵馬を捧げた。すると、返事があり、実際に美しい女がやってくる。彼にとってはまさに神が運んできたカフー（果報）であった。しかし、もちろん、それには理由があった。はてその理由とは……。

沖縄の離島の生活も本当に目に浮かぶように書かれていて、本当に「清新」という言葉がぴったりの作品だ。この作品は第1回の「ラブストーリー大賞」受賞作でもある。そう聞いて甘っちょろい恋愛小説かと思いき、遠ざけていたのだが、原田の他の作品を読んだ経験から、そんなものであるはずがないと思いき、読む気になれて本当によかった。2年生諸君は修学旅行で沖縄へは行けなくなって残念だったが、せめて本の中で沖縄気分を満喫してみたらどうだろうか。